

学位論文審査の結果の要旨

1. 申請者氏名	福島 知津子
2. 審査委員	主査：(鳴門教育大学教授) 伊東治己 副主査：(兵庫教育大学准教授) 吉田達弘 委員：(上越教育大学教授) 平野絹枝 委員：(鳴門教育大学教授) 前田一平 委員：(鳴門教育大学教授) 村井万里子
3. 論文題目 A Study on Interactive Writing Instruction for Japanese EFL Learners (日本人英語学習者を対象にしたInteractive Writing Instructionに関する研究)	
4. 審査結果の要旨 論文提出による学位申請者 福島知津子氏 から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、下記のとおり審査を行った。 論文審査日時：平成25年7月27日(土) 14時30分～15時30分 場所：鳴門教育大学 人文棟3階 第一教員合同研究室 (1)学位論文の構成と概要 <構成> 第1章：序論 第2章：L2ライティングの歴史 第3章：日本人英語学習者をとりまく近年の問題 第4章：日本人英語学習者を対象としたInteractive Writing Instructionの提案 第5章：研究I:日本人英語学習者を対象としたコンセプト・マッピングを基軸としたtop-down的ライティング指導の有効性に関する研究 第6章：研究II:英文の主語選択と文法性に関する調査 第7章：研究III:主語の選択に焦点をあてたbottom-up的ライティング指導の有効性に関する研究 第8章：研究IV: Interactive Writing Instructionの有効性に関する研究 第9章：研究V: Interactive Writing Instructionの有効性に関する研究(追実験) 第10章：結論 <概要> 本論文は、そもそも論文筆者が高校生が書いた英作文を見るという機会に恵まれ、そこから量的にも質的にも改善する余地が多くあると感じ、修士論文のテーマから継続して行っている研究であり、その目的はtop-down instruction と bottom-up instruction を融合したライティング指導 Interactive Writing Instruction を実践し、その有効性を検証することである。 第2章で外国語教育におけるライティング指導の変遷に触れ、第3章で日本の英語教育の歴史を概観し、戦後の学習指導要領の変遷と、さらにライティング指導の位置づけの変遷を概観した。その上で、学習指導要領が目指す理想像と高校生の英作文の現実との乖離を指摘した。 第4章では、top-down instruction と bottom-up instruction を融合したライティング指導、特に、top-down instruction と bottom-up instruction の間につながりをもたせることを主眼としたライティング指導である Interactive Writing Instruction の理論的背景を論述した。	

第5章では、自由英作文において何を書いてよいのか分からないという高校生の問題を解消すべく実施されたコンセプト・マッピングを活用した実験的英語ライティング指導の成果と問題点を論述した。

第6章では、日本人高校生の英作文に見られる特徴として、主題型言語である日本語の主語を主語型言語である英語の主語においてしまう傾向について検証するための調査を実施し、分析した。その調査結果から、日本語の主語を英語の主語において英文を作成するとその英文の文法性は下がる傾向にあることが判明した。

第7章では、前章の結果を基に、主語の選択に留意させるための **bottom-up** 指導、特に中間日本語を活用した和文英訳指導を基軸とした実験的ライティング指導を行った調査の成果として、事前テストと事後テストの間で英文の文法性において改善が確認されたことを報告した。

第8章では、それまでの論考を基に、コンセプト・マッピングを基軸とした **top-down** 指導と中間日本語を活用したキーワード英作文を基軸とした **bottom-up** 指導を融合した **Interactive Writing Instruction** の実験授業について論述した。事前テストと事後テストの間に実験群では英作文の量・英文の文法性質ともに改善が見られたが、統計的に有意な差は確認されなかったため、さらなる追実験を試みることにした。

第9章では、前章の課題をもとに指導の回数を増やして実施した追実験について論述した。結果的に、実験群と統制群の間に統計的に有意な差は確認されなかったものの、**top-down instruction** と **bottom-up instruction** を融合した **Interactive Writing Instruction** に、高校生によるライティングの質と量を改善する可能性があることが認められた。

第10章では、本研究をまとめ、その課題と実験の限界を明らかにし、今後の課題に言及し結論とした。

(2) 審査経過

- ・論文の意義や独創性（学校教育の実践への貢献あるいは社会的貢献を含めて）

本論文の独自性は、L2ライティングとその指導に関する歴史的・理論的考察に基づき、L2ライティング指導において、**top-down** 的指導と **bottom-up** 的指導に繋がりを持たせた指導法（**Interactive Writing Instruction**）を提唱し、その有効性を学校現場で検証した点にある。このようなアプローチはリーディング指導でよく見られるが、ライティング指導ではまだ少ない。特に、ライティングが苦手な学習者による自由英作文を改善するための方法を具体的に示した点は高く評価される。

- ・論文の発展性（今後の研究課題）

本論文で実施された実験的授業の対象は徳島県内の公立高校1校の生徒であり、研究の結果を一般化する上では課題が残る。今後、研究の対象を高校生に限定せず、中学校または、大学生に広げ、より多くの可能性を模索するとともに参加者の数を増やすことが望まれる。加えて、今回はコンセプトマップとキーワード英作文が指導の軸となっていたが、より効果的な **top-down** 的指導と **bottom-up** 的指導を模索することも必要と考えられる。さらに、**Interactive Instruction** をより効果的にするために、ライティングの授業の中での **top-down** 的指導と **bottom-up** 的指導の最適割合を決定して行くことも今後の課題として残されている。

(3) 審査結果

以上により、本審査委員会は福島知津子氏の提出した学位論文が博士（学校教育学）の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し、全員一致で合格と判定した。